

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820067

研究課題名（和文）中国山西省山間部における資源開発と社会変容の関係：碑刻資料を用いた環境社会史研究

研究課題名（英文）A research for relations between resource development and social transformation in mountain areas of Shanxi, China: A Environmental Social History using stone tablets.

研究代表者

井黒 忍 (IGURO SHINOBU)

早稲田大学・高等研究所・助教

研究者番号：20387971

研究成果の概要（和文）：

18世紀以降、急激な人口の増加に伴い、汾河流域平野部では農地開発が推進され、それまで遊水池の役割を果たしていた流域中の湖沼の多くが消滅した。山間部では政府の認可を受けた商人により林業・鉱業開発が推進され、農業に代わる主要産業となった。呂梁山区の山間部における林業および鉱業への極端な依存、山麓部および平野部における洪水・土石流被害の増加、19世紀以降に急速に拡大した罌粟栽培などによって、旱魃などの自然災害に対して脆弱な生業形態が形成され、内モンゴル南部・西部への移民が増大した。

研究成果の概要（英文）：

After the 18th century, agriculture land development was promoted in the plains part of the Fenhe river valley as the population increased rapidly, and many of lakes and marshes in the valley where the role of the flood prevention reservoir had been played disappeared. Forestry and the mining development were promoted by the merchant who received the government approval in the mountainous district, and they became major industries that took the place of agriculture. A weak occupation form was formed to the natural damage of the dry weather by the excessive dependence on forestry and mining in the mountain area and increases in the flood and the mud flow damage in the foot of a mountain part and the plains part, and rapidly expanded poppy cultivation after the 19th century. This was the cause of increase in immigrants to the southern and western part of Inner Mongolia.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|------|-----------|---------|-----------|
| 21年度 | 1,060,000 | 318,000 | 1,378,000 |
| 22年度 | 970,000 | 291,000 | 1,261,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,030,000 | 609,000 | 2,639,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史 (3103)

キーワード：呂梁・汾河・湖沼・石炭採掘・木材伐採・洪水・土石流・環境社会史

1. 研究開始当初の背景

近年の中国においては、国際的かつ多分野の研究者による社会調査が推進され、現地調査に基づく碑刻資料・口述資料の収集と学際的研究が最新の研究方法として認められつつある。

本研究の対象地域である山西省に関しても、『陝山地区水資源与民間社会調査資料集』（中華書局、2002-03年）や『環境史視野下の近代山西社会』（山西人民出版社、2007年）などの優れた研究成果が見られるが、吕梁山区への関心は依然として低く、碑刻資料の収集に関しても立ち遅れた状態にある。

山西省内における資源産出地および移民の流出源としての吕梁山区の位置づけは、中国における山西省の位置づけとも重なりあう。資源開発がもたらす環境悪化や移民の発生という問題を考える上で、吕梁山区と山西省との関係は山西省と中国との関係を写す縮図となり、さらには資源産出地と資源利用地との歴史的関係性を探るための恰好の具体例となる。

研究代表者は、2001年より8年間（計10回）にわたり、山西省および周辺地域における碑刻調査を実施し、資料収集のノウハウや聞き取り調査に不可欠な語学能力を培うとともに、調査成果を「現存碑刻目録」として学術誌上に公表してきた。

その過程において、山西省の石炭資源への依存と環境悪化という現代的問題を目の当たりにし、石炭資源の多くが日本へと輸出され、山西省には環境問題しか残らないとの現地の人々の批判を耳にした。これにより、資源開発が地域社会および自然環境に及ぼす影響という問題に強い関心を抱くこととなった。

また、研究代表者は、2006～08年度において「中国近世の山西汾河水系における水資源の開発と利用」をテーマとし研究活動を行った。これにより、吕梁山脈南麓の扇状地において山間部からの流出水を恒常的に利用する灌漑方式が、地域社会の自律的管理のもとで持続的に利用されてきたことを明らかにした。

但し、水源地である山間部の環境変化が山麓域に与えた影響を明らかにするには至らず、山麓域を閉じられた世界として扱い、考察するに止まった。そこで、本研究においては、資源問題という両地域を貫く視点を導入し、地域間の相互関係を視野にいれつつ、環境および社会の変化を明らかにする。

2. 研究の目的

現在の山西省および吕梁山区が抱える貧困化と環境問題、極端な石炭資源依存からの

脱却という課題を克服するためには、社会・環境・資源の相互関係を前近代からの一貫した視点でとらえることが必要である。その際には、一般的に政治的・経済的に優位に立つ資源利用地からだけでなく、資源産出地の視点から問題の本質を考察する必要がある。

本研究では、前近代の中国山西省吕梁山区における社会・環境・資源の相互関係の解明を目的として、以下の三点に関する考察を行う。

- (1) 鉱物および木材資源開発の歴史的推移。
- (2) 資源利用に関する各種規程の内容とその変化。
- (3) 地域社会における環境問題への対応。

本研究では、時代を資源開発が急速な進展を見せる17～20世紀に絞り、地域を吕梁山区東部の交城県に設定する。本県を選択した理由は、石炭・鉄鉱石などの鉱物資源や木材資源が豊富な地域であり、17世紀以降、これら資源を利用した製鉄業・製磁業等の諸産業が成長したこと、山間部・山麓域・平野部という異なる地理条件を包摂することによる。

3. 研究の方法

本研究では碑刻を主たる資料として資源開発・環境変化・社会変容の歴史的関係性を明らかにするため、現地調査を実施して碑刻資料の収集および読解を行った。

具体的な検討内容は以下の三点であり、それぞれ上述した研究の目的の各項目に対応する。

- (1) 地下資源採掘・木材伐採の歴史的推移、開発事業者の来歴、資源の利用目的と供給先の分布を明らかにする。
- (2) 山林への立ち入り禁止や植林などの環境保護規程および水資源に関する利用規程の内容とその変化を明らかにする。
- (3) 地域社会における人口移動に着目し、移民の流出・入の時期・目的・流出先・流入元を探り、資源開発および環境問題との関連性を明らかにする。

期間内には、2010年2月27日から3月10日までの期間に吕梁山区南部、2010年8月10日から8月22日までの期間に吕梁山区東部、2011年2月27日から3月8日まで陝西省東部の現地調査を実施し、水利および社会経済に関わる碑刻の撮影・移録、関連史料の収集を行った。

加えて、2010年10月26日から11月6日までの期間に本研究費を用いて海外研究協力者である山西大学中国社会史研究中心の張俊峰副教授を早稲田大学に招聘し、情報交換および今後の研究計画について意見を取り交わした。

張氏の滞在期間内（2010.10.31）には大阪教育大学にて行われた中国水利史研究会

2010年度大会において、張氏の研究発表「近十余年来中国水利社会史研究的新進展」の通訳を行った。

4. 研究成果

《主な研究の成果》

18世紀において人口の急激な増加に伴い、呂梁山区東部を流れる汾河の平野部においては、官民双方による灌漑水路の開鑿や堰堤の設置を通じた耕地開発が加速度的に進展した。

その過程において、汾河に沿って存在した湿地や湖沼が相次いで干拓・耕地化されたが、これは汾河の増水時における遊水地の消滅を意味するものであった。一方、山間部においては土地条件の制限により大規模な農業開発は行われず、石炭を中心とする鉱業と林業に開発の矛先が集中した。

禁令により民間における私的な鉱山開発が制限されたため、開発の担い手となったのは政府の認可を受けて採掘を請け負った地元の山西商人や内務府より認可を受けた王綱明ら特権商人らであった。

ただし、露天掘りによる石炭採掘は夏期に集中する降雨の被害を受けやすく、雨水の流入により容易に炭鉱は水没し、各地に廢坑が出現することとなった。これら廢坑や石炭採掘に伴う木材伐採によって、山間部の土壤保持能力は低下し、汾河およびその流域における洪水被害が激化した。

木材の伐採に関しては、民山と呼ばれた私有林においては伐採および自由な売買が許可されており、耕地の稀少な交城県の山間部では植樹と伐採が農業に代わる主要な生業形態となった。

その一方、磁器製造および木材伐採の進展は、山間部の表土露出を招き、山水と呼ばれる山々からの流れ出た鉄砲水は黄土高原の谷筋（溝）を流れ降る間に大量の土壌を包含し、その平野部と山麓部に土石流の被害をもたらした。

山間部における石炭や鉄などの鉱業への依存、山麓部および平野部における洪水・土石流被害の増加、19世紀以降に急速に拡大した罌粟栽培などによって呂梁山区の農業生産力はさらに低下し、呂梁山区から黄河を越えて内蒙古南部・西部への移民が増大した。

また、山西から陝西に石炭・鉄・酒・棗などの産品がもたらされ、陝西からは穀物が山西にもたらされるといった物流が確立され、旱魃などの自然災害に対して脆弱な生業形態が生み出されることとなった。

《国内外における位置づけとインパクト》

典籍史料の稀少な呂梁山区に関しては、国内外を問わずこれまで十分な検討がなされ

てこなかった。本研究においては、現地調査を通して石刻史料を収集し、これを活用することで史料不足を補うとともに、公権力側や中央からの目線とは異なる現地の目線から社会の変化をとらえることができた。

また、山間部における鉱山・林業開発と山麓部および平野部における農地開発がいずれも汾河およびその支流域における洪水・土石流被害を拡大させる要因となったことが確認された。洪水や旱魃などの自然災害とその背景となる人間活動の展開という観点から、山西地域の歴史を再構成する必要性を提示することができた。

《今後の展望》

人間活動と自然環境の相互関係を考える上で、汾河流域の湖沼の消長が極めて有効な切り口になることが本研究によって明らかとなった。中でも、干拓による湖水の減少と農地抛棄による湖水の復活という現象が歴史的に繰り返し見られた汾河中流域の文湖の変遷は、他の事例を考える上でも極めて興味深いテーマとなりうる。今後はリモートセンシングや歴史地図の解析といった方法をも採り入れて、上記テーマに関する研究を推進していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

① 井黒忍、山西翼城喬沢廟金元水利碑考—以《大朝断定使水日時記》为中心—、山西大学学报、査読有、3、2011、92-97。

② 井黒忍評、伊藤正彦著『宋元鄉村社会史論—明初里甲制体制の形成過程』、中国研究月報、査読無、65-3、2011、43-45。

③ 井黒忍著：王睿訳、清濁灌漑方式具有的対水環境問題的適應性—以中国山西呂梁山区南麓的歷史事例为中心、日本当代中国研究、査読有、2010、15-34。

<http://www.china-waseda.jp/jscc2010/pdf.html>

④ 井黒忍、金初の外交史料に見るユーラシア東方の国際関係—『大金弔伐録』の検討を中心に—、遼金西夏史研究の現在、査読有、3、2010、31-45。

⑤ 井黒忍・船田善之・飯山知保・小林隆道、河東訪碑行報告、東洋史論集、査読無、38、2010、1-37。

⑥ 井黒忍、“環境保護装置”としての信仰と文化、月刊同朋、査読無、61-4、2009、10-11。

⑦ 井黒忍、消えゆく水と現れでる碑—環境社会史研究の可能性、天地人、査読無、8、2009、16。

⑧ 井黒忍、「哈爾濱金代文化展」および記念

シンポジウム観覧・参加報告、満族史研究、査読無、8、2009、73-77.

〔学会発表〕(計13件)

- ①井黒忍、水利碑から見た分地支配と社会—山西ジョチ家投下領の事例をもとに、平成22年度九州史学会大会・東洋史部会シンポジウム、2010.12.12、福岡.
- ②井黒忍、歴史学と文理融合—オアシスプロジェクトの経験と反省から—、政治社会学会(ASPOS)創立記念研究大会、2010.11.27、東京.
- ③井黒忍、清代干旱地区対塩碱化的認識と対策—以18世紀河西三清湾屯田為例、明清以来的環境変遷と水利社会国際学術研討会、2010.11.12、中国福建省武夷山市.
- ④井黒忍・魏堅・湯卓煒・相馬秀廣、從内蒙古額濟納旗的蜂窩地形来看的边疆地区歷史上的農業土地開發、前現代中国的治边实践与边疆社会歷史變遷学術研討会、2010.10.23、中国上海市.
- ⑤井黒忍、山西翼城喬沢廟金元水利碑考—以《大朝斷定使水日時記》為中心—、首屆中国水利社会史国際研討会、2010.8.11、中国山西省臨汾市.
- ⑥井黒忍・魏堅・湯卓煒・相馬秀廣、中国内モンゴル自治区エチナ旗の「蜂の巣状」土地パターンに見る歴史的農業技術としての区田法、日本沙漠学会第21回学術大会、2010.5.29、東京.
- ⑦井黒忍、中国山西省東南部における祈雨祭祀の諸形態—天水農業地域の水認識と水神信仰に関する歴史的考察—、関西大学文化交渉学教育研究拠点第2回次世代国際学術フォーラム「文化交渉による変容の諸相—自然信仰、エスニック要素、宗教実践、言語概念と教育を手がかりに—、2009.12.12、吹田.
- ⑧井黒忍、北東アジア出土猛安・謀克印研究序説—猛安・謀克の名称と分類を中心に—、「哈爾濱金代文化展」記念学術シンポジウム金王朝とその遺産、2009.10.10、新潟.
- ⑨SOHMA Hidehiro, TIAN Ran, WEI Jien, MORIYA Kazuki, IGURO Shinobu, ITO Toshio, Unreported wall-surrounded ruins and their significance, in the case of the lower reaches of the Heihe River, Inner Mongolia, China, 14th International Conference of Historical Geographers 23-27 August 2009, Kyoto.
- ⑩井黒忍、中国農書の世界—元朝 / モンゴル時代を中心に—、学習院大学東洋文化研究所「学習院大学東アジア学ナレッジセンター・漢籍データベースセクション」、文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「東アジア学ナレッジセンター」、連続講座「東

アジア書誌学への招待」(第19回)、2009.9.25、東京.

- ⑪井黒忍、外交方式から見た12-13世紀東アジアの国際関係—金宋関係を中心に、シンポジウム「外交文書から見た東アジア海域世界」、2009.7.4、大阪.
- ⑫井黒忍、至元年間における京兆の復興—梓匠劉斌の活動を中心に—、第58回東北中国学会大会、2009.5.31、大崎市.
- ⑬井黒忍、外交方式(文書・儀礼)から見た金・宋・モンゴルの国際関係—澶淵体制における「対等」と「上下」—、第120回宋代史談話会・ミニシンポジウム「外交文書から見た東アジア海域世界—宋代を中心に—、2009.5.23、大阪.

〔図書〕(計6件)

- ①平田茂樹・遠藤隆俊編、井黒忍分担執筆、汲古書院、外交史料から十～十四世紀を探る、2011(出版予定、頁数未定).
- ②聶鴻音・孫伯君編、井黒忍分担執筆、社会科学文献出版社、中国多文字時代の歴史文献研究、2010、456(317-332).
- ③篠原啓方・井上充幸・黄蘊・水野善寛・孫青編、井黒忍分担執筆、関西大学文化交渉学教育研究拠点(ICIS)、文化交渉による変容の諸相、2010、357(75-98).
- ④天野哲也・池田榮史・臼杵勲編、井黒忍分担執筆、同成社、中世東アジアの周縁世界、2009、349(313-325).
- ⑤安介生・邱仲麟主編、井黒忍分担執筆、齊魯書社、边界、辺地与辺民—明清時期北方辺塞地区部族分布与地理生態基礎研究、2009、398(206-215).
- ⑥日本沙漠学会編、井黒忍分担執筆、丸善株式会社、沙漠の事典、2009、256(24).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井黒 忍 (IGURO SHINOBU)
早稲田大学・高等研究所・助教
研究者番号：20387971

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし